

ヘミングウェイの文体

三 留 修

ヘミングウェイ (Ernest Hemingway, 1899-1961) の文体は、平易で簡潔であるとよく言われている。たしかに会話で物語を進めていく手法や、and や but でつなぐ文章が多くみられる。また俗語表現も初期の短編を除くと少ない。また、最初の長編小説『春の奔流』(*The Torrents of Spring*, 1926) を除くと、すべての長編の舞台が外国である。そのために作中人物の会話は、その国の言葉が使われずに英語で表現されている。フランス、スペイン、イタリア、ケニア、キューバ等が作品の舞台になっているが、短い語句以外はすべて英語が使われている。

まず、『殺し屋』“The Killers” (1927) の緊迫した場面を会話調で描くところを取り上げてみたい。

George looked up at the clock.

‘If anybody comes in you tell them the cook is off, and if they keep after it, you tell them you’ll go back and cook yourself. Do you get that, bright boy?’

‘All right,’ George said. ‘What you going to do with us afterward?’

‘That’ll depend.’ Max said. ‘That’s one of those things you never know at the time.’

George looked up at the clock. It was a quarter past six. The door from the street opened. A streetcar motorman came in.

‘Hello, George,’ he said. ‘Can I get supper?’

‘Sam’s gone out,’ George said. ‘He’ll be back in about half an hour.’

‘I’d better go up the street,’ the motorman said. George looked at the clock. It was twenty minutes past six. (228)

この場面は、殺し屋の Max が食堂の主人の George に客が来たら断るか、自分で料理するように命じているところである。はじめに時計を見上げて、中頃でまた見て、最後にも見た。これだけの表現で、主人がいかに命をねらわれている Ole Andreson が入ってくるのを心配しているかを表している。会話と「時計を見る」、そして時間の推移だけで緊迫した状況を描いている。6時15分となっているが、20分進んでいるので実際はいつも食事にくる予定の6時5分前である。これほど平易な英文で書かれると、何となく軽く読んでしまいがちであろう。この作品では、一貫して説明文をはぶいて会話文で話を進めている。

また、『武器よさらば』(*A Farewell to Arms*, 1929) には、平易な長文が見られる。

Maybe she would pretend that I was her boy that was killed and we would go in the front door and the porter would take off his cap and I would stop at the concierge’s desk and ask for the key and she would stand by the elevator and then we would get in the elevator and it would go up very slowly clicking at all the floors and the boy would open the door and stand there and she would step out and I would step out and we would walk down the hall and I would put the key in the door and open it and go in and then take down the telephone and ask them to send a bottle of capri biango in a silver bucket full of ice and you would hear the ice against the pail coming down the corridor and the boy would knock and I would say leave it outside the door please. (38)

これは主人公の Frederic Henry が、Catherine Barkley にホテルに行った
らこうなるであろうと空想しているところである。ヘミングウェイにしては長
い文章だが、and を20回も使って一つの文章にしている。また、would も15
回使われて、自分の気持ちを一気に表現しようとしていることがわかる。

しかし、これを一般の人間が書いたらどうなるか。いかに一気に言い切ると
しても長すぎるであろう。ヘミングウェイが and を多く使うと言われるゆえ
んであり、平易だが翻訳者を苦しめる文章の一つである。

ところが、1930年代の作品には長い文章が見られる。『アフリカの緑の丘』
(*Green Hills of Africa*, 1935)には長い、退屈で、難解な文章がいくつかある。
とくに第二部の6章には1頁半にわたる426字の長文がある。とてもここに引
用する頁の余裕はない。これはアフリカでの狩猟に関する描写ではなくて回想
しているところで、とりとめのない言葉がだらだらと続き、読む必要がないと
言いたいぐらいの文章である。犀を追って車で移動中に主人公が、昔のことを
夢の中で思い出しているような描写が続く。いきなり、メキシコ湾流は人類の
誕生以前から動いているように流れていて、人間の描く真実が小さなものに見
えてくる。その周辺の国の人々の行政制度、富、貧困、殉教、買収や残虐な行
為などは、そこに浮かんでいるがらくたと同じものだと言う。

『アフリカの緑の丘』は、狩猟記の形式をとっているが、回想というか雑談
が多すぎる。その雑談のなかに多くの作家が実名で登場して、ヘミングウェイ
の本音がうかがわれる。第一部の1章で、アメリカですぐれた作家は Henry
James, Stephen Crane, Mark Twain の3人であるとか、現代のアメリカ文
学は『ハックルベリ・フィンの冒険』からはじまる、というよく知られている
文章や、Poe に関する批評などがある。

この作品や『持つと持たざるもの』(*To Have and Have Not*, 1937) を出
版するにあたって、ヘミングウェイは編集者のパーキンズ (*Maxwell Per-*
kins, 1884-1946) や友人に創作状況と内容について手紙でこまめに連絡をとっ
ている。そこではいつもこれまでとは違う作品に取り組んでいるとか、書き上
がると今までで一番よい作品になったと連絡していた。

ここで、「フランシス・マコーマーの短い幸福な生涯」(“The Short Happy

Life of Francis Macomber, ” 1936) から、長い文章の一例をあげる。

The car was going a wild forty-five miles an hour across the open, and as Macomber watched, the buffalo got bigger and bigger until he could see the grey, hairless, scabby look of one huge bull and how his neck was a part of his shoulders and the shiny black of his horns as he galloped a little behind the others that were strung out in that steady plunging gait; and then, the car swaying as though it had just jumped a road, they drew up close and he could see the plunging hugeness of the bull, and the dust in his sparsely haired hide, the wide boss of horn and his outstretched, wide-nostrilled muzzle, and he was raising his rifle when Wilson shouted, “Not from the car, you fool!” and he had no fear, only hatred of Wilson, while the brakes clamped on and the car skidded, ploughing, sideways to an almost stop and Wilson was out on one side and he on the other, stumbling as his feet hit the still speeding-by of the earth, and then he was shooting at the bull as he moved away, hearing the bullets whunk into him, emptying his rifle at him as he moved steadily away, finally remembering to get his shots forward into the shoulder, and as he fumbled to re-load, he saw the bull was down. (32)

ここは主人公のフランシス・マコーマー、妻のマーゴットと、ガイドでハンターのウィルソンが、3頭の水牛を見つけて車で追跡してそのなかの1頭を打ち倒した場面である。臆病になってるフランシスが車の中で銃をかまえたためにウィルソンにどなられ、あわてて車から飛び降りて水牛めがけて連射する。この後で残りの2頭もしとめることになる。この作品の中でもっとも長い文章である。やはり and を15回も使っている文章で、フランシスとウィルソンのぎくしゃくした関係をにおわせながら、目の前の獲物を倒すことに二人は気持ちを集中させている。

30年代の作品には『午後の死』(*Death in the Afternoon*, 1932)もある。これは随筆の形をとっているが、ノンフィクションというか闘牛の解説書である。闘牛の写真をつんだんに挿入して、後半の三分の一は闘牛用語辞典になっている。説明する文章が多いので一つの文章が長い、それほど難解な文章はない。しかし、平易で簡潔な文章とはいかず、闘牛に興味をもってる人以外には読みたい作品とはいえない。ヘミングウェイ愛好家にとっては、本人の文学に限らず芸術一般に関する考えや本音が詳細に書かれているところには興味をひかれる。小説に描かれている人間は、作家の中に同化された体験、知識、頭脳、心、その人の全存在から投射されなければならない、と彼は言う。

この10年間では、「キリマンジャロの雪」(*"The Snow of Kilimanjaro"*, 1936)と「フランシス・マコーマー」以外の作品は高い評価を得ていない。そこには文体がくどくなるという変化がみられただけでなく、雑談めいた内容を入れたり、自らの体験とはほど遠い内容が語られている。30歳代で作家としてもっとも勢いがあつたはずのときに実験的と言ってもよい横道にそれた感がある。

1940年に『誰がために鐘は鳴る』(*For Whom the Bell Tolls*)が出版されると、『武器よさらば』以来の高い評価を得ることになる。この物語は、スペイン内戦で鉄橋爆破を命じられた青年が、ゲリラ隊の力を借りて4日間足らずでなんとかやりとげる話である。重厚な文章で描かれてだけでなく、ヘミングウェイの体験が生かされている。もちろん彼は新聞記者としてスペインに滞在していたのであるが、かなり前線にまで踏み込んでいたと伝えられている。この作品から、また10年間作品が発表されなかった。

1950年に『河を渡って木立の中へ』(*Across the River and Into the Trees*)が出て、52年に『老人と海』(*The Old Man and the Sea*)が出版されて、ヘミングウェイが出した作品は終わる。彼の死後に次々と出版されたものから、様々のことがわかってきたが、文体については『老人と海』で完成したと考えたい。生き生きとした会話、カジキを追いつめる緊迫した描写、老人とカジキとの心理戦、思い出にふける老人の姿、サメとの戦い、サメに食い荒らされて骨だけになったカジキを見る老人の心境等、どれをとっても完成された文体に

なっている。ヘミングウェイの一番の長所は文体である。

谷口陸男氏が『ヘミングウェイ研究』の中で、ヘミングウェイを大衆小説家とか私小説家と言ったことがある。

彼の作品が大衆小説的であることを示す特徴は一、二にとどまらない。第一にそれは美男美女の物語—もっと正確に言えば女主人公はすべて美女であり、主人公は勇者であり超人の面影を備えている。第二にそれらの主人公が活躍する当然の結果として、小説はアクションの多い冒険活劇物語に近い。第三に、それらは無責任な立場において—というのが誤解を招くとすれば、読者に義務や責任を強制しない立場において書かれている。第四に、人々は承服しないかもしれないが、彼の小説は大願成就の小説である。そしてこれらはすべての大衆小説が必ずといってよいくらい常に持っている特徴ではないのか。(70)

これはかなり大胆で日本的な発想だが、谷口氏はそれぞれの作品について検証をしていった。大衆小説とか私小説というのは、日本の文学界特有の考え方であると思うが、ここまで言うのならむしろ中間小説とする方が適切かと思う。ことばの使い方に時代を感じるが、ヘミングウェイ没後すぐに書かれたのを考えれば、大筋で当を得ている。外国人として、日本流の鑑賞法があってもよいであろう。もっとも日本の私小説はあくまで作家本人の事実をこと細かに描写する方法である。

ヘミングウェイは、放浪するようにいろんな国で生活して、その体験を作品に結びつけた。しかし、自分の国を舞台におくことはしなかった。また初期、中期、後期と11,2年ごとに話題作を産み出した。アメリカの多くの作家が、生まれ故郷を舞台の中心においた作品を描いた。

平易な文章と舞台が外国のためか、ヘミングウェイの作品は出版と同時によく売れた。もちろんいくつかの作品は期待はずれもあり、そのたびにヘミングウェイは書評をかなり気にしていた。没後に出版された手紙の中にその気持ちがよく表れている。

全般にわたって述べたかったために、個々の部分について走りすぎた。もっとこまかく分析すべき点については、また別の機会を得たい。

参考文献

Hemingway, Ernest. *The First Forty-nine Stories*, Jonathan Cape, 1962.

_____, *A Farewell to Arms*, Jonathan Cape, 1963.

_____, *Green Hills of Africa*, Jonathan Cape, 1962.

_____, *For Whom the Bell Tolls*, Jonathan Cape, 1975.

_____, *The Old Man and the Sea*, Scribners, 1952.

_____, *Ernest Hemingway Selected Letters*, Scribners, 1981

Brucoli, Matthew, Jr. *Conversation with Ernest Hemingway*, University Press of Mississippi, 1986.

谷口 陸男、『ヘミングウェイ研究』（ヘミングウェイ全集、別巻）三笠書房、1965.